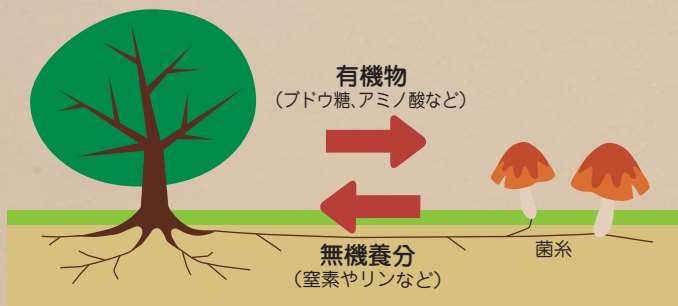


キノコはどどこに生育する？

長い間、キノコは植物の仲間と考えられていましたが、植物のように光合成をしないことなどから、「植物」とは異なる「菌類」という独立したものとされています。では、自力で栄養をつくることができないうキノコは、自然界でどのように栄養を摂って生育しているのでしょうか。

菌根性(マツタケ、ホンシメジなど)



生きている樹木と共生するキノコの仲間です。菌根性キノコは樹木の根に菌糸を伸ばし菌根をつくって、お互いに栄養のやりとりをしています。また、菌根性キノコは樹木の成長を促進したり、土壌中の病原菌から樹木を守る役割を果たしたりしています。

腐生性(シイタケ、ハタケシメジなど)



倒木や枯れ木、落ち葉などの有機物を分解し、栄養分として利用するキノコです。森林の中が枯れ木や落ち葉でいっぱいにならないのは、腐生性のキノコが分解して、土へと還してくれているためです。その役割から「森のお掃除屋さん」といわれています。

寄生性(冬虫夏草)

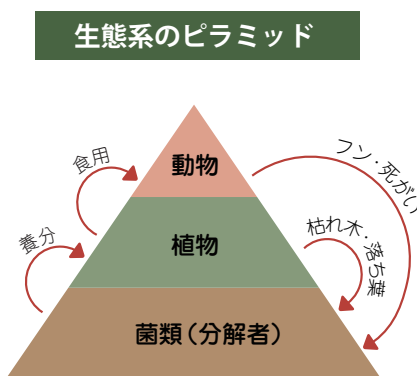


寄生菌は生きて動物に寄生して、一方的に栄養分を摂取します。いわゆる「冬虫夏草」のことで、「虫を倒すキノコ」ともいわれています。昆虫に菌類がついて、その体内に菌糸をまん延させ、やがて昆虫を死に追いやって、キノコが発生します。

生態系を支える菌類

キノコの役割

自然界の生物は主に「動物」、「植物」、「菌類」にわけられます。菌類の仲間であるキノコは、自然界の分解者や、植物との共生者とよばれます。



キノコには、枯れ木や落ち葉、動物のフンや死がいなどを分解し、養分を土の中へ還すはたらきや、樹木と栄養分をやり取りして成長を促すというはたらきがあります。

キノコは小さな生物ですが、しっかりと生態系の底辺を支えています。もしも、菌類がいなければ、この自

然界の循環は途絶えてしまいます。森林の生態系の保全に、菌類であるキノコの存在は、大きく関わっているのです。

身近なキノコを見てみよう！

森の産物であるキノコが古くから日本で食されてきたのは、昔の人々が自然豊かな里山と密接な暮らしをしていたからではないでしょうか。

昔の人々は、燃料となる薪や炭や落ち葉を集めるために、近くの里山へ入る習慣がありました。里山に人が入ることによって、雑木林の維持管理がなされ、キノコにとっても住みやすい環境が作りだされていたのです。

しかし、現代では、生活様式の変化や大規模な開発によって、キノコを取りまく環境に変化が起こっています。食材としてだけでなく、生物としてのキノコの役割を知り、森林で暮らすキノコにもっと目を向けてみてはいかがでしょうか。